



共同通信



2007年6月15日 130号(340号)

日本基督教団 西宮共同教会月報 〒662-0834 西宮市南昭和町 10-22
0798-67-4691 FAX 0798-63-4044、Email:koudou@gamma.ocn.ne.jp
<http://www.koudou.jp/> 振替 01170-3-4901
ホームページアドレスが新しくなりました。

時代にふり回されるのではない 自分の人生を語ってほしい、
あの時 心を躍らせて生きた 自分の人生を語ってほしい、
後悔に 身をふるわせたこともある 自分の人生を語ってほしい、
笑い 泣き 歯ぎしりをした 自分の人生を語ってほしい、
今日 こんな決意をしたという 自分の人生を語ってほしい

To tell the story 30

『私が出会った人たち』

前任の田中先生が共同通信でずっと連載してこられた「私が出会ったいろんな人たち」。田中先生の後をついで私が共同教会で働かせて頂く事になり、初めて共同通信の原稿を書かせて頂く事になって、何の事を書こうかといういろいろ考えました。初めて共同教会に来てから3ヶ月たちますが、他の場所では考えられないほどたくさんの人たちとの出会いを与えられました。ずっと事務所の中にも教会学校、幼稚園、神学塾、地域、教区など、共同教会からいろいろなつながりをもっ

て関わってくださっている方たちと、毎日会ったり、お話しする機会が与えられるのです。

そこで、私も今回そんな出会いの中の一つについて、「私が出会った人たち」と題名を付けて書かせて頂きたいと思います。

教会の伝道師、というのは教会の中にいながらも聖書について勉強する時間が中々とれないことがあります。しかし共同教会では新約聖書学、旧約聖書学、宣教学、ギリシア語と多くの学問に触れる機会が与えられます。関西神学塾、またギリシ

ア語の授業が週に1回ずつ行なわれているのです。関西神学塾、ギリシア語の先生たちから受ける授業に出席して、先生方が、教会で生きた現実を心に抱いて語っていると感じさせられます。私はいつも必死に頭を回転させてついていこうとしていますが、必死になってしまうほど先生方の授業は心が惹きつけられるのです。

聖書、というのはずっと昔に書かれた書物ですが、今なお私たちの心を揺さぶり続けています。世界中で一番のベストセラー作品であり、様々な言語に翻訳されて各国で読まれています。聖書を学ぶ、ギリシア語を学ぶ、というのはイエス・キリスト（キリスト教）へのアプローチ方法の一つで、世界中の学者がそれを研究、模索し、それでも全てを掴みきれずにいます。しかし、関西神学塾、ギリシア語の授業に出ることで、私たちは先生方が聖書へアプローチしているのを身近に感じる事ができ、それによって自分もその世界に引き込まれるような感覚を覚えることができるのです。

ところで、私は大学の修士課程にいたとき、16世紀にエラスムスと

いう神学者が出した新約聖書を研究していました。エラスムスはオランダの生まれで、ヨーロッパの様々な国で研究を続けた人物です。彼が出した新約聖書はラテン語で書かれています。現在ヨーロッパで使われていないのは、変化が多く難解であったからではないかと思わせるほど、私にとってラテン語の翻訳は困難でした。けれど彼の書いた文章を読んでいると、当時と今の時代に何百年もの隔たりがあっても、同じ本（聖書）を読み、少しでもその意味を探ろうと努力しているのを感じ、どこか親近感がわきます。エラスムスに関しては多くの著作が英語に訳されていますが、不思議に英文を読むとエラスムスのラテン語と格闘しながら研究しているカナダの学者の姿が思い浮かぶのです。言語を学ぶ楽しさはそんなところにあるんだと思います。

といいつつも、私はいつもなまけてつい人が訳した聖書ばかり読んでしまいます。自分でもアプローチしなければ、、と思いながら、先生方の講義を聞くばかりです。けれど講義を受けるたび、少しでも先生方に習い、勉強していきたくと思わされ

ます。このような気持ちを抱くことが出来るのは、先生方と"出会う"ことができたからだと心から感謝しています。

出会い、というのは良くも悪くも人の人生に大きな影響を与えます。というより、出会いが人の人格を形成していくといっても過言ではありません。それなら良い影響を与えてくれる人にだけ出たい、と思ったりするものですが、中々上手くはいきません。時には「この人は苦手だ」とか「この人と自分は合わないかもしれない。。」というような人とも出会ってしまうのが人生です。

でも、私はそういった出会い全てに何か意味があるのだと信じています。過去を遡ればいくつもの

素敵な出会いが思い起こされますが、その中でも今の自分の思想や信仰に影響を与えてくれた、そんな出会いは今でも私の心の中で宝物のように大事にしているものです。

共同教会で出会えた方たちとの出会いも、これから共同教会で出会う方たちとの出会いも、大切にしていきたいと思っています。

(大平 有紀)

日本基督教団西宮共同教会集会案内

早天祈祷会	毎月1日午前6時30分から	於：西宮共同教会集会室
教会学校	毎週日曜日午前9時から	於：西宮共同教会礼拝堂
聖日礼拝	毎週日曜日午前10時45分から	於：西宮共同教会礼拝堂
聖書研究祈祷会	毎月第1・3水曜日午後7時から	於：西宮北口西伝道所
読書会	毎月第2・4水曜日午後7時から	於：西宮北口西伝道所
ゆっくり聖書を読む会	毎月第3火曜日午前10時から	於：西宮共同教会集会室

不正確さや危険に関し私は皇帝が危険と見做しで考えた
たと思われるのと同じように考え、各々ある、つまり用心するのであれば、危険は様々な価値を認めやうべきであり、危険がまた豊かさや享受する機会がよ、と考えかたもある。もちろん、危険な部分にはできるだけ最小限に留めると条件づけたが。

(ルカの外ユリスタイル)

ルカによる福音書16章19節以下のように、人の存在を“金持”と“貧乏人”に分類してしまうのは、今の時代だったら“勝ち組”と“負け組”にしてしまうのと似ていなくはありません。金持ちは「彼は紫の衣や細布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた人」のことで、貧乏人は「金持ちの玄関の前に座り、その食事から落ちるもので飢えをしのぐと望んでいた。その上、犬がきて彼のできものをなめていた」として描かれています。今の時代の勝ち組(金持ち)と負け組(貧乏人)の間には相当のへだたり“格差(差別)”がありますが、古代社会でもそのへだたりは相当のものでした。

というように、生きている時に“格差(差別)”があったとしても、いつか必ず死を迎えるということでは、どんな“格差(差別)”も吹っ飛んでしまいます。グリムの昔話「死に神の名づけ親」は、神でもなく悪魔でもなく、「...誰にでも平等な死に神」に名付け親を引き受けることになりました。「...『わしを名付け親にしときなよ』『あなた、何者です?』『わしや死に神でな、だれにでも平等だ』
4 『そりゃそうだ。あなたにかかっちゃ金

持ちでも貧乏人でも分けへだてなくだもの。名付け親になってくださいよ』貧乏人はそういって、死に神はこたえて...」(「ねずの木。そのまわりにもグリムのお話いろいろ」L・シーガル、M・センダック選・画、矢川澄子、福音館)。

金持ちと貧乏人を描いたルカによる福音書は、死んでしまうことでは“平等”だった金持ちと貧乏人の、“その後”は逆転することになります。贅沢三昧で暮らしてしまった結果、金持ちが受けることになったのは「黄泉にいて苦しむ」ことで、貧乏人・ラザロは、御使いたちによって「アブラハムのふところ」に導かれることになります。“その後”が地獄と天国になってしまうこと、そうやってしまっちはもう取り返しがつかないことが宣告されます。だったら、ということで“金持ち”は「...わたしの父の家へラザロをつかわしてください。わたしに5人の兄弟がいますので、こんな苦しい所へ来ることがないように警告していただきたい」と願い出ます。その願いは「彼らにはモーセとがある、それに聞かざるや」と退けられます。金持ちは「...もし死人の中からだれかが兄弟たちのと

ころへ行ってくれましたら、彼らも悔い改めるでしょう」と食い下がります。しかし、そうして食い下がったものの「...モーセと預言者に耳を傾けないなら...彼らはその務めを聞き入れはしない」と避けられてしまいます。

金持ちにも貧乏人にも、アブラハムからの情報は届きます。貧乏人が特に聞く耳を持っていたということではないらしいのですが、結果から言えば金持ちはそれに耳を傾けて聞くということをしませんでした。「毎日ぜいたくに暮らしていた」生活で、モーセと預言者に耳を傾けて聞くことの必然性は、今一つ薄かったらしいのです。

ということに、“耳を傾ける”“聞く”ということに、特別の人の特別の能力が求められるわけではありません。普通に生活している人の、普通の生活感覚さえあれば、多くのことは聞こえてきます。しかし、発信されていることのすべてが懇切丁寧という訳ではありませんから、合図はあったのに聞こえないということも起こります。だから、ただ“聞く”のではなく“耳を傾ける”と強く指示しているのかも知れません。

“モーセに耳を傾ける”で言及されているのは、出エジプト記20章1～17節に示されているおよそ20にまとめられる“戒め”です。この場合の戒めはよくよくながめてみると、特別の何かを自分に課することではなかったり

します。あるいは、“修業”のようなことをして、結果身につけるものではなく、普通に生活する人であれば、そんなに踏み外すことがないのが、モーセの戒めだったりします。もちろん、そんな程度のことから、どんどんどんどん外れていってしまうのも、人の営みだったりするのですが。

“...預言者に耳を傾ける”で言及されているのは、エレミヤ書だと「およそ人を頼みとし、肉なる者を自分の腕とし、その心が主(なる神)を離れている人はさいわいである」「およそ主(なる神)にたより、主を頼みとする人はさいわいである」(11章5、7節)となりますが、特別の何かを自分に課することではないのは、モーセの十戒の場合と同様です。

こうしたことは、“聞く”というささやかな営みの中にしか手がかりは得られない、というのはただ平凡であるだけではなく、残酷であるというのがルカによる福音書の“教訓”です。

(菅澤 邦明)

アコーク回一通信(110)

6月の沖縄。6月23日が県の条例で「慰霊の日」に定められています。1945年4月1日、沖縄本島に上陸した米軍の組織的戦闘が終わったのがこの日といわれています。もっとも日本軍の司令官と参謀長が自決したのは6月22日ともいわれています。また、かなり後まで逃げ惑っていた人々も大勢いるのです。逆に4月1日に米軍の捕虜になった人もいるのですから、6月23日は象徴的な日なのです。沖縄県は慰霊のために「休日」にしています。県下の公共機関、学校は休みです。国立の機関は開いています。ただ2007年は土曜日なのであまり恩恵は受けません。日本が右傾化するなかで、沖縄戦がらみの訴訟が起こっています。「集団自決」はあったかなかったか、という議論が訴訟にまでなっているのです。沖縄戦時、沖縄住民は戦火の中で逃げ惑っていました。米軍に追い詰められた場面で、家族同士、隣近所同士で命を絶ったのです。それは、捕まったら男は八つ裂き、女は犯されると聞かされ、「生きて虜囚の辱めを受けず」と教育されてきたからですし、日本軍が沖縄に駐屯してからは絶えずそのように直接的に、間接的に住民に教えてきました。男は八つ裂き、女

は強姦、とは日本軍がアジアでやってきたことで、戦争とはそういうものだと言われ、沖縄の人々も感じたのです。多くの朝鮮人が沖縄に連れてこられ、男性は人夫として、女性は「慰安婦」として働かされました。給料など絵に描いた「軍票」で渡され、人間以下の扱いを受けていたことは沖縄の人々は見えていました。戦闘の最終場面では、「ひめゆり」学徒隊などや住民にも「手榴弾」が、それで「自決」するようにと手渡されました。

今、この国は、あったこともなかったようにしようとしているのです。すでに「沖縄ノート」を書いた大江健三郎氏と発行元の岩波書店を被告とする、「軍命はなかった」訴訟が大阪地裁で開始されています。あべソリやネット右翼まで「なかった」の大合唱です。けれども、現地の沖縄では、自ら体験してきたことです。東京のマスコミなどが、口下手な沖縄の人に言葉巧みに近付いて「どの軍が命令したのか」「文書か口頭か」など矢継ぎ早に質問し、答えられないのを見て、「やっぱりなかった」という図式です。こういうレベルに易々と乗せられる沖縄戦研究も課題があるのですが、沖縄では危機感を募らせています。

当時20歳の人でも今は82歳です。当時20歳くらいで沖縄戦の全体像がわかるはずはありません。自分の目の前で起こったことを証言し、時に、言い間違いや記憶違いもあって、「学的」には矛盾することもあるでしょう。もちろん、言いたくないことも、また「捏造」もあるかもしれませんが。仮に裁判で「軍命」の証拠がなかったとされて、それなら沖縄の人々はなぜ死んだというのでしょうか。渡嘉敷で、座間味で、チビチリガマで、なぜ母親は自分の子供を手にかかけ、自ら命を絶ったのでしょうか。辺野古には自衛艦まで登場し、自衛官が調査に加わっています。

沖縄では、その自衛隊の姿がかつて住民を追い散らし、無理難題を押し付け、ついには「自決」を強要した日本軍の姿と重なるのです。そう、62年前、沖縄住民の土地と命など虫けらのように扱って、日本軍と米軍が我が物顔にふるまった姿が今と重なるのです。

そして、それは近い将来、沖縄だけではなく、日本のどこにでもある風景となるのかもしれないのです。なんとなく、梅雨の空と同じで、沖縄では曇り、涙のような雨が降っているのです。

(沖縄 与那原 愛の園 後藤 聡)

共に生活をして。。。。

新年度が始まって約3ヶ月。この3ヶ月の間は驚きの連続でした。共同幼稚園を卒園し、学生の頃はよく幼稚園に来ていたので、共同の子どもたちのことは知っているはずでした……。しかし、いざ共同の世界に入ってみると何も共同のことを分かってなかったじゃないかと思い知らされました。

共同に入ってます、しないとだめだと思ったことは赤縄を手に入れる

ことです。先生方はもちろん持っているし、年長の子どもたちも何人が持っていたので年少の頃にもらったのかと思うと自分も負けてはいられないという気持ちが強くなってきました。1000回に挑戦したことはなかったけど心の中では「簡単にできるわ」と思っていました。が、やっぱり何も分かっていませんでした。200~300回くらいになると子どもが走ってきてよく縄に当たった

りしていたのですが、引っ掛かっていつも思うことは「1000回無理かもしれない・・・」という弱気な気持ちと、「年少の頃によく1000回も跳んだな」という驚きの気持ちでした。弱気になった時もありましたが結果、自分の気持ちは折れることがなくやっとの思いで1000回跳ぶことができました。赤縄贈呈式もしていただき、グリコもおいしくいただきました。

年長の担当ということもあって、年長の子どもたちと散歩、おでかけによく行きます。その散歩先、おでかけ先でも驚かせられました。共同の子どもたちはよくでかけ、そして何よりもよく歩きます。4月に出かけることも多くぽっぽ、年少で鍛えられた“足”だからこそ歩けるということもあると思うのですが「年長になってすぐにこんなにでかけて、よく歩くなあ。スゴいな。」と一人感心していました。4月からの3ヶ月間いろいろな所におでかけし、歩きましたが幼稚園から今津の灯台まであるいたのが最長記録だと思います。津門川はどこまで流れているのかと

いうことで今津の灯台まで歩いて行きました。歩いて行くと聞いたとき「車でも結構かかるのに歩くと一体どれくらいかかるのだろう」と想像もつきませんでした。結果は約2時間半！帰りは阪急今津駅から帰ってきたのですが電車の中で改めて「本当によく歩く。よく遊ぶ。」と思いました。

この3ヶ月間は驚きの連続でしたが、発見もたくさんありました。子どもたちは今を楽しみ、必死になって生きているということが心に響きました。子どもたち自身はそういう風に感じていないかもしれませんが共に過ごしてきて感じました。ひとつのことをやりきる気持ち、諦めない気持ち、何事も楽しむ気持ち、そして何に対しても一生懸命で真剣な気持ち。これらのことは生きていくために必要な気持ちだと思います。これから先、身体的には成長して変わっていくと思いますが、この共同で育んだ気持ちを大切に持ち続けてほしいと願っています。

(馬場田 悠作)

大切な贈り物・津門川 58

“美しい街”

四十谷川の柳の並木の下を、青いセキレイ一羽が、あめんぼうの這う水面をチョロチョロととびまわる。今津線沿いの用水、伏原川では、松並木の下で、緑の藻が陽を受けてゆったりと水中で輝きゆれる。ちょっと歩くと、昭和園のなかにも、田んぼが隠されていて、泥のなかで気持ち良さそうに蛙がなく。

甲陽園の街角の老桜や街角の松、お屋敷から道を覆いつくす桜…。辻にそびえる楠。古いマンションの脇にもおおきな楠並木が並ぶ。それに連なる隣家の庭のきんもくせい匂い。その隣の梅で鶯が、自宅のFMにあわせて啼く。雨が降り出す前は、小さな蛙が甲高い鳴声をあげる。

駅前の公園は、いつも整備され美しい花が咲き、いろいろな人が笑談している。若者が音楽を弾き語りしている。なんて人間サイズの美しい街なのだろう。数年前に、神戸から移ってきた私の感想である。

小さな宝石箱を重ねたようなこの美しい街のデザインに、一本、みずみずしい太筋をひくのが津門川である。右岸歩道は、細くなったり広くなったり、人間の呼吸のように続く。そこを幼稚園の子どもたちがガヤガヤ散

歩する。ふっとのぞくと、おおきな芙蓉の花が護岸石の間から広がり、水辺に黄色の花が咲く。毎日のことなので、鯉の顔も覚えてしまった。いつもの鯰も、鶯も知り合いだ。その川を見る視線の先に、美しい枝垂桜がたたずむ。

美しい街の細い道には、思い思いの、それでいて何となく色彩トーンが緑・茶に定着している町並みが続く。私はこの美しい街がいとおいしい。その骨格である川に感謝したい。この幸せを、街の人々といつまでも共有できたらいいなあ…。

そう思って、日曜の昼、川掃除に参加している。いや、この幸せを守る活動に、多くの街の人と関われる喜びをかみしめている。河床でゴミを捨てる時、ドンドコ、ドンドコ、太鼓の音が聞こえる。村祭…？ 建築現場の金槌音も、川の底ではそう響くのだ。

民俗学の創始者：柳田國男はいう。「美しい村などどこにもない。そこに美しい暮らしぶりがあるだけである」と。私は、美しい街に関われる幸福に感謝している。

課題は、山のようにある。でも、それは今は数え上げない。この街の

人々と一緒に解決する機会を賜った
と思っている。一生の楽しみと考え、
ゆっくり良くしていきたいなあ…。

森栗茂一(昭和園自治会)

2007年6月 あんなこと こんなこと…

- ・6月 1日(金)午前6時30分～、早天祈祷会
- ・6月 10日(日)午前10時～、花の日合同礼拝
- ・6月 12日(火)午前10時～、ゆっくり聖書を読んでみませんか
- ・6月 14日(木)午後6時～午後8時 教会教育研究会「幼児期」
(岡本夏木)を読む。兵庫教区・教育部委員会
於：西宮公同教会集会室
- ・6月 24日(日)平安荘ワークキャンプ
- ・7月 1日(日)「こんちくしょう/障害者自立生活運動への先駆
者たち」(製作総指揮：福永年久)上映会・シンポ
ジウム。於：西宮市総合福祉センター多目的ルーム

にしきた商店街…

- ・6月 9日(土)午前10時～12時 “第9回津門川塾”
「野生メダカが生活し、繁殖できる自然環境を求めて」
於：西宮公同教会集会室
- ・6月 17日(日)午後12時30分～ “津門川掃除”

アートガレーヂ

- ・6月 5、19日(火)野菜市

関西神学塾

- ・6月 8日(金)桑原重夫先生 「使徒行伝を読んでみよう(24)」
- ・6月 15日(金)勝村弘也先生 「死海文書を読む(25)」
- ・6月 22日(金)田川建三先生 「マルコ福音書註解(中)(40)」

教会学校から

《5月の活動報告》

5月6日(日)
いちご摘み

5月13日(日)
母の日礼拝
お母さんと一緒に”作って食べる”
ノルウェー風ちらし寿司

5月20日(日)
ちょっといいこと
“命、平和について考える”

5月27日(日)
作って遊ぶ
“あやとり”

《6月の活動予定》

6月3日(日)
クリーン大作戦

6月10日(日)
花の日合同礼拝

6月17日(日)
お父さん”出番”です
お父さんと一緒に“グリムの絵本”を
楽しむ

6月24日(日)
作って遊ぶ
“吹き矢で遊ぶ”

今月のあ・そ・び “あやとり”

「世界あやとり紀行展」というものが「国際あやとり協会」が中心になって開催されていることを新聞で知って、世界で“あやとられている”代表的なあやとりの実物を見ることになりました（2007年5月5日～25日、INAXギャラリー、大阪）。もともと、あやとりは得意ではありませんでした。“男の子”だからではなく、あやとりの遊びを更に楽しむきっかけに出会わなかったからだと思います。遊びは、その遊びに深入りしてしまう“変人”がいて、他愛もなかったはずの遊びの世界はうんと広がって“名人”が誕生したりします。竹とんぼの場合、“スーパー竹とんぼ”の発明・出現で遊びの世界はうんと広がりました。竹とんぼの場合の“変人”は、亡くなった秋岡芳夫さんです。それは、竹とんぼの翼の両端を少し重くする（軸に近い部分を薄く削るなど）ことから始まりました。竹とんぼの翼を極端に薄く、軽く削って、両端に“重り”を埋め込み回転力を増すことで、高度、滞空時間、飛距離をのばすのがスーパー竹とんぼです。そのことのきっかけを作る“変人”がいて実現したのがスーパー竹とんぼの世界です。

子どもの頃のあやとりでは、竹とんぼの場合のような“変人”と出会うこともないまま、少しだけ遊んでおしまいになっていました。最も“一人あやとり”をあっという間にやり終えてしまう、それなりの“名人”もいましたが、それが更に発展するというのには出会わなかったように思えます。

そんなあやとりのことで「世界あやとり紀行展」に出会って、こんなことを企画した人たちや、紹介されていた何度の高いあやとりのことで、驚いたり嬉しくなったりしています。これらのことがきっかけで行方不明になっていた2冊のあやとりの本も見つけ出すことになりました。（いずれも、その昔古本屋で手に入れた？）

「あやとり」

（野口広、河出書房、1980年）

「あやとり」

（野口広、大陸書房、1980年）

2～3回足を運ぶことになった「世界あやとり紀行展」では、INAXギャラリースタッフの高橋さんに、何度の高い“耳の大きな犬”という犬が“動いてしまう”あやとりを教えてもらいましたが、マスターしていません。

（菅澤 邦明）

まいのなんでも案内

気付けば新年度も二ヶ月が過ぎてしまいました……。早いです。早すぎます。まだカレンダーが4月のままです（今さっき二枚めくりました）。まだダウンジャケットとコートをクリーニングに出せてません（もう手遅れなんて言わないで下さい）。まだ授業受ける教室がどこか分からなくて迷います（もはや方向音痴では済まされません）。まだ、まだ……と言う間にも時間は経つもので、もう開き直って毎日を充実させるしかないな、と思ってます。実際今年度は相当色んなことに手を出しているので、充実という言葉が相応しい生活ではあるんです。大学生活三年目にしてやっと、という気も若干しますが、悪いことでは絶対がないので、それなりに楽しんでます。というか今月から色々正念場になりそうなので、失速しないように頑張ります。

さて、とりあえず今月のヤマ場はシナリオリーディングコンテストというものです。これは、関西の大学生のESS（English Speaking Societyの略。英語劇とか英語ディベートとか英語スピーチとかの活動をする）部やらサークルやらがいくつか集まって、それぞれ30分ほどの英語朗読劇を行う、小さな大会です。私は

生まれてから今までESSに所属したことはないんですが、中高の友達の縁で今回、参加することになったのです。わー。英語喋るのもお芝居するのも久しぶりなのでテンション上がりつつ緊張もしております。というわけで今回は、その、私たちのやる演目(の原作)をご紹介しますと思います。去年か一昨年にキーラ・ナイトレイ主演で映画化されたのでご存知の方もいるかと思いますが、イギリス小説の名作『高慢と偏見』です。実際映像として有名だったり評判が良かったりするの、イギリスのBBC(?)でドラマ化されていたものらしいのですが、私は映画も割と好きです。ダーシー役の声がめっちゃいいんです。さすが舞台俳優……。固そう、古そう、難しそうー！と思われる方も、映画から入るととっつきやすいですよ。原作も勿論良いです。ていうかイメージより全然古くないんですよ。今読んでも充分面白くて、名著と言われるのにも納得します。とりあえずあらすじを。

時は18世紀イギリス。ロンドン郊外の田舎町に暮らすベネット家には年頃の五人姉妹がいた。ある日の舞踏会で長女ジェインは近所に越して来た青年資産家ビングリーと出会

う。一方、次女エリザベスは、ビングリーの友人ダーシーの高慢な発言と態度に反感を抱く。出会いを重ねる内にダーシーは聡明なエリザベスに惹かれていくが、プライドの高さが災いして打ち解けられず……。といった感じです。この文章はコンテストのパンフ用に私が5分で作り上げたものですが(苦笑)全く物語の魅力が伝わらないものになってしまっているのが、非常に残念です。ではこの作品の魅力は何だろうというと、やはり主人公エリザベス(生まれは貧しいが聡明でしっかりした女性))と青年貴族ダーシー(美形で超金持ちだけどプライド高くて超愛想悪い)のやり取りです。二人の心理描写や、言葉の交換の緊張感は、さして大事件も起こらない話展開なのに、惹きつけられます。

と、固い紹介はここまでで、あとは卑近な話を。コンテストは中高出身者ということで女性ばかりで演じるのですが、必ず出る話題が「ビングリー派？ダーシー派？もしくは意表についてウィッカム派？」です。ちなみにあたしは断然ダーシー派。ビングリーなんて優しすぎます。いや、でもダーシーも優しすぎるか……。でもウィッカムはないし……。(ちなみ

に私の役はウィッカム……。演じるのめっちゃ楽しいです)。読んだ方は是非是非聞かせてくださいな。お待ちしております。

(高橋 舞)

つとがわ 編集後記

昨年9月に「ゆっくり聖書をよんでみませんか」が始まり、6月に10回目が終わりました。“聖書を読む”ことを期待して集まった方には、期待はずれというか、周辺から聖書を眺めるくらいのことしかできていません。それで、聖書の“核心”なのですが、多く描かれているのは、神を拒む人のことだったりします。本当のところ聖書から読み取るべきなのは、そのあたりの問題なのかも知れません。7月10日に予定されている、「ゆっくり聖書をよんでみませんか」は、「人は何のために生きるのか / 本当の自分を考えてみる」です。人のことを、あれこれ思い巡らしながら、今少し聖書に迫れたらと願っています。(K)

「先月、誕生日を迎えました。たくさんの人にお祝いしてもらったり、久しぶりの友だちからメールや手紙がたくさん届いたりしました。こんなに多くの人に支えられて今の自分があることに改めて気付くことができた1日となりました。」(Y2)

先日、久しぶりに家族揃って外食しました。父と笑って喋ったのがとても久しぶりな感じがしました。今は普段父が家にいても会話を交わすのはほんのわずかです...昔はいっぱい喋っていたけれど...幼い頃、毎朝父と手をつないで通園したこと、家族で出かけたことなど昔のことがよみがえりました。家族そろって過ごす時間を大切にしたいと感じたひとときとなりました。(N)

教会の玄関にめだかがいます、と前号で書きましたが、先日近くの大学へ子ども達と出かけ、またまためだかをいただいてきました。そのめだかが園舎の水槽で元気に泳いでいます。そして毎日卵からかえる稚魚がどんどん増えています。稚魚の餌となるのはゾウリムシで、そのゾウリムシにも餌があって、

きな粉と小麦粉を1:1で混ぜ合わせたものなんです。餌にも餌を～、なんだか餌をやりながら笑ってしまいます。面白いですね。

(I)

孫3歳6ヶ月、この子の頭の中の回路はどうなっているのかと思うほど、よく覚えていてよくしゃべってとにぎやか。便利なことも多い。「おおきいじいちゃん(わたしの施設で生活している父)のどこ、またいこうね」と、彼女がたまたまどうしてると質問してきたので、答えておいた。と、次の日曜日午後、共働きには休息していただろう両親を「おばあちゃんが、おおきいじいちゃんのとこいってあげてというとった」としっかり連れ出してきた。いや、なかなかやるわい。よくまあこれだけしゃべるわと思うけれど、でもすべて耳から取りいれているのは確か、勝手に湧いてきているわけではないのが子どものことば。彼女の話には形容詞が多くまた名詞を言うときは必ず何か説明がつく。「あのかぼのえほんをよんでくれたおみせやなあ」、またよく聞いている。「うちのパパは、だんなやねん」なるほど。「おばあちゃんいつもようかたづけとうのに、きょうはどうしたん」はいはい散らかっています。あなたのおしゃべりほど進化はせず、いや何事も退化しています。(J)